小狐クネヒト？

― カララシュヴィリの論をもとに一言、『ガラス玉遊戯』の構成と「易」について ―

石　橋　邦　俊

カスターリエンのガラス玉遊戯名人、ヨーゼフ・クネヒトの死を、仮にこの作品に初めて接する一人の読者であったとして、我々はどう受け止めるだろうか。

旧ソ連のヘッセ研究者、レソ・カララシュヴィリが1971年に発表した論文「ヨーゼフ・クネヒトの死」には、1969年のロシア語訳『ガラス玉遊戯』刊行直後の批評から、クネヒトの死に関し、幾つか紹介されている。

「行為の世界、実践の世界との、既に最初の出会いにおいて、この全く無意味な偶然の死は、ヨーゼフの無力を意味している」[1)]（タマーラ・モチュリョーワ）

「なおかつ、カスターリエンの伝記執筆者がそのような終わりを受け容れてはいないことは、押さえておこう。彼にとってそれは単に「伝説」に過ぎない。ヘッセがクネヒトのために見つけ出した唯一の活動領域は、一人の個人の教育である。ヘッセは我々に、現実世界で生活しているクネヒトを全く示してくれない。クネヒトの人生という音楽上の主題は、耳をつく不協和音によって中断される。主人公は高山の湖で無意味に命を落とすのだ。彼がその活動の場で成果を上げていたか否か、我々には皆目、不明なのである」[2)]（E.マルコヴィッチュ、ロシア語版の解説）

また、ソ連初のヘッセに関する博士論文を書いた W.セデルニクは、クネヒ

1）Michels, V.(hrsg.) „Materialien zu Hermann Hesses ‚Das Glasperlenspiel'" (以下、M. zu „Gl.") Bd. 2, Frankfurt a. M. 1977, S. 221.

2）Ebd., S. 221f.

トの死は「無意味」で「理性的に見て受け容れ難い」[3]と記したという。

クネヒトの死を「無意味」と断ずるこうした否定的解釈の代表的先例として、ドイツのエディット・ブレーマー（1949）にも言及されているが[4]、カララシュヴィリは、ヘッセの作品全体を視野に収め、そこから『ガラス玉遊戯』の位置づけを試みる考察姿勢の欠如が、この誤解の一因であると考えている。

カララシュヴィリはまず、『ガラス玉遊戯』中の伝記執筆者の言葉とヘッセ自身の書簡[5]をもとに、これらの解釈を否定し、更に、『ガラス玉遊戯』を「事実レヴェル」と「象徴レヴェル」という二つの層を有す作品と捉え[6]、後者の観点からクネヒトの死を解釈し直そうとする（ただしそのためには「様々のイメージ、シンボル、モティーフ、そして、それらの相互関係についての正確な知識を要する」[7]）。

しかし、この彼の再解釈は「象徴」という言葉を弄する研究に時折り見受けられる、作品と作者の世界からの身勝手な乖離に陥ることはないにせよ、たとえば「朝」は「ヘッセの象徴レヴェルの術語法において」、「ヘッセが目覚めと呼ぶ心理状態を示している」と言うように[8]、言葉と言葉、イメージとイメージの繋がりを手繰りながら、「事実レヴェル」のいわば裏側をたどっていくその方法は、ことさら特筆に値するものではあるまい。少なくとも筆者には、カララシュヴィリがクネヒトの死の意味を問うに際し、前提として提示している「研究生時代」の竹林の場とクネヒト伝終結部の対応（彼の「象徴術語法」に

3）Ebd., S. 222.
4）Ebd., S. 221.「カスターリエンの外の世界で第一歩を踏み出そうとした時に突如訪れるクネヒトの死は、我々には当然のものと思われる。カスターリエンの人間は、社会では生きていけないのだ。しかし、この死の契機は何とも無意味と思われてならない。精神において秀でた者にスポーツを課すなど、土台無茶な話だ」
5）Ebd., S. 223.
6）Ebd.
7）Ebd., S. 224.
8）Ebd., S. 230.

よる解釈は、ここから出発する）、そしてそこから顕れてくる「易」の関りこそ、彼の創見と思える。

『ガラス玉遊戯』全篇でおそらく最も印象的な場面のひとつである、クネヒトと「大兄」のエピソードは、クネヒト伝の第三章に当たる「研究生時代」で報告されるが、クネヒトの中国研究、殊に「易」との接触には、カララシュヴィリも短く指摘しているように、クネヒトの「目覚め」、或いは「目覚め」の自覚の契機となった点において[9]、クネヒト＝ヘッセの「中国」を考える上で注目せざるを得ない。

この竹林の場とベルプント山荘の場に見られる幾つもの一致をもとに、カララシュヴィリの「象徴術語法」解釈が展開されていくのだが、筆者はその再解釈の細目ではなく、むしろ「易」の一卦「蒙」による両者の対応に興味を惹かれる。前者においてクネヒトの滞留如何を問う易占から得られる「蒙」の卦を、「山」（☶）の下に「水（＝湖）」（☵）がたたずむ後者の場面設定（「彼の前には、灰色を帯びた緑の小さな湖が、波ひとつなく横たわっていた。向こうには、切り立った高い岩壁が、淡い緑色を見せる冷たい朝の空に、深く切れ込んだ、幾つもの鋭い稜線を浮き立たせ、寒々と影をつくっていた」[10]）のむこうに透かし見るこの解釈は、作品を創り上げるヘッセの思考を垣間見せてくれるように思えるのだ。クネヒトを自己認識へ導いた竹林滞在の始まりに明示された「蒙」の卦は、彼の死の直前の場面に滑り込まされ、ここでクネヒトの生涯と作品『ガラス玉遊戯』に明確な枠を設定しているのである。しかし、視野を広げれば、「研究生時代」と「伝説」の二章には、一見しただけでも、幾つかの対応が見出される。

9）Hesse, H.: Gesammelte Werke in 12 Bänden（以下、GW）Bd. 9, Frankfurt a. M. 1970, S. 139f.
10）Ebd., S. 465.

クネヒトが教育州当局から彼の回章への拒絶の返答を受け取った後、ふと思い出す詩「階梯」は、東アジア研究所滞在期、殊に「目覚めと名付けた精神的体験が彼に恵まれた、あの特別なある一日」[11]に書き付けられた。

研究生時代の終わりに、教団への採用に当たり、師傅たる音楽名人から瞑想のために課せられた教団規則の一条（「敬愛すべき官庁が役職に任ずる時、心せよ。職務の位階における昇任は、どれも、自由への一歩ではなく、束縛への一歩である。職務権限が増すほどに、奉仕は厳格となる。個人の力が強められるほどに、恣意は厳禁される」[12]）を、クネヒトはアレクサンダーとの会談の前に思い出す。この条文は、そのまま本文に再提示されている。

聖クリストフォルスになぞらえてクネヒトがアレクサンダーに語る、奉仕のための「最高の主人」を求める衝動は、「音楽とガラス玉遊戯への大きな才能」とは別の彼の内なるもうひとつの力、「いわば一種の独立心、高い意味での自我の意志とでも言うべきもの」[13]として、「研究生時代」に短いながらもはっきりと先取りされている（無論、これは、クネヒトの生涯を見渡しうる伝記執筆者の立場から、整理の上で明示された「赤い糸」と言うことも可能だが）。

こうした対応を仮に作者の意図の産物と考えた場合、『ガラス玉遊戯』の構成はどのように見えてくるだろうか。

筆者に想定できる見方は三種である。

『ガラス玉遊戯』は、副題の示すように、遊戯名人ヨーゼフ・クネヒトの伝記全十二章に、クネヒト自身の手になる詩篇と三つの「履歴書」を添え、巻頭にガラス玉遊戯の概略と成立史を紹介した序章を置く。クネヒトの「遺稿」は、クネヒト伝の「ヴァルトツェル」「研究生時代」に書かれたものであるから、

11）Ebd., S. 410.
12）Ebd., S. 151. u. 415.
13）Ebd., S. 142.

これを伝記に組み込み、文字どうりの「導入部」„Einleitung“ の後に、作品の本編として、名人の生涯十二章が綴られると考える、これが作品の構成を考える上で最も自然だろう。

副題には、序章とクネヒト伝、及び「遺稿」の編纂者として、「ヘルマン・ヘッセ」なる人物の名が記されている。序章と伝記がこの人物によって書かれたか否か不明ながら、両者は一人の筆者によると見て差し支えないだろうから、これをひとつに括れば、新聞文化文芸欄時代の後に俗世からカスターリエンへ上向した線は、クネヒトの歩みによって再び俗世へ帰り、ここでひとつの円を閉じる。この見方に立てば、一般に作品のテーマと目されている社会的実践の強調という一種道徳的教訓は、形式上の観点から、幾分、相対化されるだろう。

1931年春[14]、ヘッセが主人公を「X」と置いて書き留めた、おそらく最初期の構想メモでは、一個の魂の五つの輪廻の生涯を描くオムニバス的作品が想定されていた。完成された『ガラス玉遊戯』は既に見たようにヨーゼフ・クネヒトの伝記を中心に組み立てられているが、この初めの構想が何らかのかたちで最終的な段階まで保持されたと仮定すれば、三つの「履歴書」は遊戯名人伝と等価となり、『ガラス玉遊戯』は序章と詩篇も含め、全十七章を有すことになる。この時、「研究生時代」は第四章、「伝説」は第十三章、この二つの章を枠とし、教団メンバーとしてのクネヒトの活動を描く八つの章の両側に、三及び四（うち一章は詩篇）と、ほぼ同数の章を配した簡潔な構成が浮かび上がってくる。

また、十七章の中心に位置する第九章「二つの極」は、幼少期からクネヒトの胸底にあった一種の無常の感情（「この人は早い時期から、歴史研究の洗礼を受けるはるかに前にも、すべて生成したものの無常と人間の精神によって創

14）Mileck, J.: Hermann Hesse Dichter, Sucher, Bekenner, Frankfurt a. M. 1987, S. 280f.

造されるすべてのものの問題性に自ずと結び付いていく、ある世界感情を心に有していた」[15]）が、彼の生涯に欠くことのできぬ三人の人物との交流と彼自身の歴史研究を経て、現に在るものを誠実に保持する、教団への無私の奉仕と、目覚め、前へ踏み出し、「現実」を把握し理解しようとする別様の、この二つの姿勢、二つの「極」へ展開したことを跡付け、更に、教育者、また魂の医師としての彼の非凡な才能について言及している。クネヒトの過去をひとつの視点から整理し、同時に伝記中では未来に属するカスターリエンからの脱退までも視界に収めた「二つの極」は、形式と内容のいずれにおいても、クネヒト伝の分水嶺と位置付けられたと考えられる。

「研究生時代」と「伝説」に現れるモティーフの対応が、実際は後者にはじめて登場し、物語の流れを遡って前者と結び付けられる詩「階梯」（「伝説」の章全体を駆動させているのは、このモティーフだが）は別として、既出の主題を異なった調性において再現する、一種形式上の役割以上に、指示的な意味を持つのは第三の場合だが、これもあくまでも、こうした対応が作者によって意図されたという仮定に基づく解釈に過ぎない。またこの場合でも、いずれも文字によって書き留められている、教団規則や「最高の主への奉仕」のモティーフと、事実レヴェルの背景に忍び込まされた「蒙」卦とは、別様に扱うのが適当だろう。

『ガラス玉遊戯』の構成から、一旦、カララシュヴィリが指摘するこの「蒙」卦に目を転じてみたい。

竹林の場で「大兄」が演じてみせる（？）のは、49本の占竹（正確には50本だが、太極をかたどる一本は、初めに取り置き、以後、用いない）から、一定の所作を三度繰り返して（「三変」）、ひとつの徴を得、更にこれを六回行って

15）GW. Bd. 9, S. 289.

一卦を得る最も正式な占法[16]である。三変が示す陰、もしくは陽の徴「爻」は、下から上へ重ねられ、三爻を以って一卦を作る。所謂「八卦」である。八卦には、自然、家族構成、方角など、各々に象徴的な性格が割り振られている（「蒙」の内卦（下の卦）「坎」は「水」、外卦（上の卦）「艮」は「山」である）。この八卦を二つ重ね、六十四卦が成る。占いの答えは、卦全体を説明する「卦辞」、各爻について述べている「爻辞」[17]から読み取ることになる。

「蒙」は、「乾」「坤」「屯」に続く「易」の第四卦[18]、「大兄」が託宣としてクネヒトに示したのは、その卦辞である（ヘッセは R.ヴィルヘルムの訳に、一ヶ所、小さな変更を施しているのみである）。

Jugendtorheit hat Gelingen.
Nicht ich suche den Toren,
Der junge Tor sucht mich.
Beim ersten Orakel gebe ich Auskunft.
Fragt er mehrmals, ist es Belästigung.
Wenn er belästigt, so gebe ich keine Auskunft.
Födernd ist Beharrlichkeit.[19]

16）易占に際し、ヘッセは略式の擲銭法を用いていたようだが、「大兄」の占いのこの滑らかな描写を読むと、或いは、筮竹を用いた占筮を一度は目にしていたのではないかと考えたくなる。ヴィルヘルム訳『易経』にも、占いの仕方が記されているが、その些か煩瑣な説明だけから、この簡にして要を得た叙述を導き出すのは、ほとんど不可能ではないだろうか。

17）六爻は下から、一応、世に出る前の人物（「庶人」初爻）、位は低いが、第五爻の君主と志の通ずる可能性のある人物（「士」二爻）、君主に近くはないが、位の高い人物（「大夫」三爻）、近臣（「公卿」四爻）、君主（「君」五爻）、退隠の人（「無位の尊者」六爻）を指している。クネヒト伝第四章「二つの教団」で、マリアフェルス出立前のクネヒトが得た占断は、「旅」の第二爻の爻辞である。トーマス名人（「閣下」＝「君」）の信任を得、教団に採用されたクネヒト（二爻）の最初の仕事に対する託宣として、適切な選択である。

18）因みに、この卦が現れる「研究生時代」は、序章から数えて第四番目の章である。

19）GW. Bd. 9, S. 138.

蒙は亨る。
我童蒙を求むるにあらず。
童蒙来たりて我に求む。
初筮は告ぐ。
再三すれば、瀆る。
瀆るれば告げず。
貞しきに利あり。

この竹林の場で「蒙」の含意は明らかである。「我」は「大兄」その人、「童」とはクネヒトに他ならず、この童は「緋鯉のようにおとなしく」（「貞しきに利あり」）教えられるものを受け止めねばならない。

山峡のベルプント山荘の朝では、「大兄」の位置にクネヒトが、そして若き日の彼の位置にティトーがおかれるものの、「蒙」卦の含意に変化はないと、カララシュヴィリは考えている[20]。精神のエリート中のエリートが集うカスターリエンの頂点をきわめたクネヒトを前に、父親への反感も手伝って、精神への侮蔑を装うようになったティトーは、なるほど「童蒙」だろう。少年はクネヒトに「精神の貴族」を認め、その教えを受けようと心を整えているのだから、「我、童蒙を求むるにあらず。童蒙来たりて我に求む。」はそのまま成就しているようである。

しかし、尾根の鋭角な稜線を溶かして太陽が上る時、「蒙」卦は異なった次元へ移される。

太陽と夜明けの自然を迎える無意識の舞踏に顕れた少年のその最も深い本性は、クネヒトの予想をはるかに超えて、頑強で巨きかった。未知の、しかし、

20）M. zu „Gl.“ Bd. 2, S. 230.

対等の価値を持つ者として、この時ティトーは新たに姿を現したのである。

一方、ティトーにとってこの数瞬間を聖別し、祭典へと高めたのは、朝の自然への喜びだけではなかった。夜を昼へ導く巨大な天体への帰依と祈りは、彼の現在と未来に、これまでになかった変化をもたらすだろうマギステルに、同時に捧げられたのである。

ズールカンプ社版全集で三段落、二ページ余りのこの場面に、固有名詞は二度、ティトーの名が見られるのみである。クネヒトはここで「マギステル」（三度）「傍らで眺める人」、そしてティトーの目から「讃嘆と畏敬の念を抱かせる人、叡智と音楽の人、神秘に満ちた領界から来た、魔術的な遊戯の達人、未来の彼の教育者であり友である人」、ティトーは「少年」（二度）「彼（＝クネヒト）の生徒」「自分の気分から抜けきれない、半ば子供の若者」「若い人」「森の神パーンに憑かれたように熱狂した者」と呼ばれ、その余においては両者に対し、共に代名詞「彼」とその変化形が当てられている[21]。

「昼をもたらす天体」の光に四大元素が沸き立つこの一種コスミックな空間にヘッセは、クネヒトとティトーを可能な限り、その具体的個人的性格から抽象し、しかし、青春の力と成熟した知恵と認識はそのままに、生きた典型として据えようと試みたと筆者には思えてならない。この空間に対等の立場で対極に立ちながら、求める者は求められる者であり、導く者は導かれる者であり、しかし共に己れを相手に差し出し奉仕するという、ヘッセにとっては「師－弟」の関りの純化された理想でもあったろうか。

ティトーは言うまでもなく、カスターリエンの外の世界で、新たな「目覚め」のもたらした新たな段階で自ら選びとった使命を自覚し、いわば零の地点にいるクネヒトも、ここでは「童蒙」となるのである[22]。

21）GW. Bd. 9, S. 466ff.

ベルプント山荘の場にカララシュヴィリは、更にもうひとつ、「易」の卦「未済」を見出している。

湖を太陽が照らす情景は、内卦の「坎」（＝水）に外卦の「離」（＝火）が重なる「未済」（䷿）に基づくと言うのである[23]。彼がその論に引く卦辞（„Zauberformel“）は、„Vollziehung ! Der junge Fuchs hat die Furt beinahe durchschritten, aber seinen Schwanz naßgemacht- nichts Gutes“[24]、おそらくロシア語訳を自らドイツ語へ重訳したのだろう。ヘッセが親しんだヴィルヘルムの訳文ではない。また、カララシュヴィリは、この卦辞に付された「ソ連を代表する中国学者」J.K.スチュツキの注釈が、『ガラス玉遊戯』のフィナーレに見事に該当すると述べている、「情況は、最後にカオスが生じるように展開する。しかし、カオスは創られたものの壊滅と見なされてはいない。常に新しい、時と共に新たになる無限の創造の可能性、その永遠性である」[25]カオスとも捉えられかねないクネヒトの死が、未来のティトーの中で新たな創造を生み出すという解釈だろう。

「易」の最終第六十四卦「未済」は「坎」の上に「離」を置いた卦象で、逆に「離」に「坎」を重ねた第六十三卦「既済」（䷾）と対を成している。「少し亨る。貞しきに利あり。初めは吉にして終わりには乱る」という「既済」の卦辞に対し、「未済」のそれは「亨る。小狐汔（ほと）んど済（わた）る。其の尾を濡らす。利するところなし」、完成された秩序がその完成故に崩壊していくよりない「既済」（奇数爻は陽、偶数爻は陰）より、無秩序の極点から秩序が再建されていく時に当たる「未済」（偶数爻が陽、奇数爻は陰）を（占者への戒めを含みながら）

22）この「師－弟」の関りは、クネヒト伝第六章「遊戯名人」で、名人任命を前に瞑想するクネヒトの脳裏に現れる映像を想起させる。Ebd., S. 236ff.
23）M. zu „Gl.“ Bd. 2, S. 230.
24）Ebd.
25）Ebd., S. 230f.

高く評価し、また、「未完成」を意味するこの卦を最後に掲げ、永遠の変化を暗示するのは、「易」の、もしくは中国思想の知恵だろう。「未済」の基本的性格をヴィルヘルムは、「無秩序から秩序への移行がまだ果たされていない時」を暗示するが、「いわばすべてが凍てついた冬から実り豊かな夏へ移る途上の春」の象であると解説し、「この希望に満ちた展望を以って、変化の書『易経』は閉じられる」[26]と付言する。上に引いた卦辞の、ヴィルヘルムの訳はこうだ。

Vor der Vollendung. Gelingen.
Wenn aber der kleine Fuchs,
wenn er beinahe den Übergang vollendet hat,
mit dem Schwanz ins Wasser kommt,
dann ist nichts, das fördernd wäre.[27]

ヴィルヘルム訳『易経』が刊行されたその翌年、1925年の同書書評[28]や1926年６月４日、ヴィルヘルムに宛てた書簡[29]に見られるように、ヘッセはヴィルヘルムの言葉から「易」の世界を組み上げていくというより、個々の卦の象徴とイメージに沈潜しながら、「易」を、いわば自らに染み込ませていったのだろう。「易」をめぐるヘッセの発言は僅かだが、カララシュヴィリの論を是認すれば、クネヒト伝終結部は、作家の想像力が取り込んだ「易」のあり様を瞥見させる具体例といって良い。

無論ヘッセは、「易」における「未済」の意味も位置も承知していたに違いない。„Vor der Vollendung. Gelingen.“ とは、ティトーの教育というクネヒ

26）Wilhelm, R.(Ü): I-Ging das Buch der Wandlungen, München 1990, S. 233.
27）Ebd.
28）GW. Bd. 12, S. 33ff.
29）Hesse, H.: Gesammelte Briefe Bd. 2, Frankfurt a. M. 1979, S. 471.

トの使命が、果たされぬままに（或いは、果たされぬからこそ）成し遂げられることを示唆していよう。敬愛する師の死に対する罪を自覚するティトーは、「神聖な戦慄とともに」[30]、変貌せざるを得ない自分を予感するが（これも「目覚め」ではないだろうか）、以後、その変貌を導くのは、言うまでもなくクネヒトの姿だろう。「流れ移ろうなかにあって移ろわぬもの、時代を超えて伝えられるもの、精神の活動それ自体の連続性を表す形式としての輪廻」[31]の一断面が、文学のイメージにおいて定着されているのである。

„Vollendung“ とは、また、クネヒトの生の「完成、完結」ではないだろうか？　筆者は今一度、『ガラス玉遊戯』の構成に立ち帰りたい。

ガラス玉遊戯名人クネヒトの生涯が、その終わりにおいてすら „vor der Vollendung“ 未完結であるとは、「履歴書」の三つの生涯が、単に若き日のクネヒトの創作であるばかりではなく、輪廻の三つの生でもあり、最初期の構想が作品の完成に到るまで、文学作品の形式によりふさわしく変じながらも保持されていた、ひとつの証左と解することも可能だろう。第三の「履歴書」、「インドの履歴書」末尾に体験話法で綴られるヨーガ行者の言葉は、このように見れば、一登場人物の内的独白という以上の意味を帯びてくる。

> この羊飼いの王子、自分のもとへ逃げてきたこの哀れな男は、泉の水を汲んできただけだ。ものの四半時も経ってはいない。とはいえ、牢獄から帰ってきたのだ、妻を、子を、王侯の位を既に失い、人の生をひとつ終え、回る輪を目の当たりにしてきたのだ。おそらくこの若者は、以前にも一度、或いは数度、目覚めさせられ、真の存在をわづかばかり呼吸したものでもあろう、さもなくばここを訪れ、かくも長く足をとどめることはあるまい。

30）GW. Bd. 9, S. 471.
31）M. zu „Gl.“ Bd. 1, S. 294.

> だが今は、真に目覚めたようだ、長い道に歩み出すに熟したとみえる。姿勢と呼吸をこの若者に正しく手ほどきするにさえ、何年もかかるだろう。[32]

最終的な「目覚め」は、ここで訪れるのだ。[33]

既に見たように、「未済」の卦辞には「亨」という占断に一風変わった文言が続いている。「小狐汔済。其尾濡。无攸利。」、川を渡る小狐が、岸に泳ぎつく直前に、揚げていた尾を濡らしてしまった、思う事はやがて成るが、今は慎重に行動するが良いというのである。

「急いで泳げば、陽が届くより早く、向こうの岸へ行けますよ」と、心はやって水に飛び込んだティトーは、クネヒトを失い、対岸へ到ることはできなかった。ティトーを追ったクネヒトは、湖に没してしまう。二人は「小狐」だったのだろうか？

「未済」の卦辞にヴィルヘルムは、こう注釈している。

> 情況は困難である。使命は大きく、責任を要する。世界を混乱から秩序へ引き戻すこと、まさしくそれなのだ。しかしそれは、成功を約束された使命である。何故ならば、別々の方向へ向かっている力をひとつにまとめることができる目標があるのだから。ただし、ひとまず、まだ、注意深く穏やかに歩を進めねばならない。氷を渡る老練な狐のように進まねばならない。氷上を行く狐の用心深さは、中国では諺にもなっている。狐は常に氷の軋みに耳を澄まし、慎重に注意深く、最も安全な場所を探し出す。こ

32）GW. Bd. 9, S. 613.
33）「マーヤー」の夢から覚めた時、ダーサは森の陽光に照らされ、泉のほとりに立っていた。「未済」ここにも隠されている。また、「ダーサの生涯について語るべきことは最早ない。余は、かたちと時間の彼岸で行われたのである」（GW. Bd. 9, S. 613）究極の「完成、完結」は、語られ得ないのである。

のような心配りをまだ知らない若い狐は、勝ち気に任せ、向こう見ずに進んでいく。そこで、もう氷を渡りきるというところで落ちてしまい、尾を濡らすことがあるのだ。こうなれば、苦労はすべて無駄になってしまう。

このように、完成の前の時には、熟慮と慎重さが、事を成し遂げるに欠くべからざる要件である。[34)]

ヘッセの「易」の受容法は、ヴィルヘルムの訳文や注釈の細部に関わるものではなかっただろう。しかし、ヴィルヘルムのこのパラフレーズを読む時、筆者は、戯れにせよ、ベルプント山荘でのクネヒトを重ね合わせてしまうのである。誤って氷を踏み割り、尾を濡らしてしまう狐と、一人の少年の信頼に応じようとして命を落としたクネヒトを同列に語るならば、些か不謹慎と言うべきかもしれない。だが、「利するところなし」という卦辞の戒めに比して、何かしらユーモラスなヴィルヘルムの解説の趣に甘えながら、精神世界の頂点に位したこともある遊戯名人の自己犠牲を未熟な小狐の失敗に並べてみると、「未済」を、ひとつの生から次の生へ受け継がれていく不滅の精神活動の暗示と見る解釈とは別に、ヘッセのユーモアやアイロニーが想像できるようにも思えるのである。

＊本論文中の「易」の読み下し文は、本田済著『易』（上、下）朝日文庫（昭53）に依った。

34）„I-Ging“, S. 233f.